

古文 読解問題 「沙石集」 ～歌ゆえに命を失ふ事～ ①

天徳の御歌合のとき、兼盛、忠見、ともに御隨身にて、左右に番ひてけり。初恋といふ題を給はりて、忠見、名歌詠み出したりと思ひて、①兼盛もいかでこれを行うの歌詠むべきとぞ思ひける。

恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知らずこそ思ひそめしか

さて、すでに御前にて講じて、判ぜられるに、兼盛が歌に、

つつめども色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで

判者ども、名歌なりければ、①判じわづらひて、②天氣をうかがひけるに、帝、忠見が歌をば、両三度御詠ありけり。兼盛が歌をば、②多反御詠ありけるととき、天氣左にありとて、兼盛勝ちにけり。

③忠身、心憂くおぼえて、心ふさがりて、不食の病つきてけり。頼みなきよし聞きて、兼盛とぶらひければ、

「別の病にあらず。御歌合のとき、名歌詠み出だしておぼえ侍りしに、殿の『ものや思ふと人の問ふまで』に、③あはと思ひて、あさましくおぼえしより、胸ふさがりて、かく重り侍りぬ。」と、つひにみまかりにけり。

問一、次の「沙石集」の知識に関する問いに答えなさい。

① 「沙石集」が成立した時代を答えなさい。

② 「沙石集」と同じジャンルの作品を次の選択肢の中から全て選びなさい。

ア 枕草子	イ 土佐日記	ウ 大和物語	エ 宇治拾遺物語
オ 十訓抄	カ 伊勢物語	キ 日本書紀	ク 古今著聞集

問二、傍線部Ⅰ～Ⅲの動詞の主語として適切なものを次の選択肢から選びなさい。

ア. 兼盛 イ. 忠見 ウ. 天皇 エ. 歌読みの場にいた人たち

問三、傍線部①「兼盛もいかでこれを行うの歌詠むべきとぞ思ひける」を現代語訳しなさい。

問四、傍線部②「天氣をうかがひける」とあるが、「天氣」が何を表しているか答えなさい。

問五、傍線部③「忠身、心憂くおぼえて、心ふさがりて、不食の病つきてけり」の理由として、最も適切なものを選びなさい。

ア. 歌読みの際、相手の詠んだ歌に驚嘆し、兼盛の歌との才能の差を感じ心苦しくなったから
イ. 歌読みの際、自信のある歌を詠むことができたが、まったく評価されず悲しく感じたから
ウ. 歌読みの際、思うように歌を詠むことができず、天皇を落胆させてしまったと考えたから
エ. 歌読みの際、天皇が自分の歌を繰り返し読まないことに対し、嫉妬したから

読解問題 「沙石集」歌ゆえに命を失ふこと」 ① 解答・解説

問一. ① 鎌倉時代後期

② エ(宇治拾遺物語)、オ(十訓抄)、ク(古今著聞集)

∴『沙石集』は、仏教的教訓や和歌などについて書かれている仏教的説話集になるため、選択肢から「説話」を選べば正解となる。アの『枕草子』は随筆、イの『土佐日記』は日記、ウの『大和物語』とカの『伊勢物語』は歌物語、キの『日本書紀』は歴史書となる。

問二. I エ

II ウ

III イ

問三. 兼盛もどうしてこれほどよい歌を詠むことができようか、いやできないと思った

∴「いかで」が反語の意味になるため「詠むことができるだろうか、いやできない」という訳になり、「べき」は可能を表す。

問四. 天皇のご意向

問五. ア

∴「殿の『ものや思ふと人の問ふまで』に、あはと思ひて、あさましくおぼえしより、胸ふさがりて、かく重り侍りぬ」の部分を読すと、「兼盛の歌に「ああと」思つて、驚いたと思つたときから病氣になつた」となるため、相手の歌と比較した結果、病氣になつたとわかるためアが正解になる。